

第 20 回大会シンポジウム

なぜいまギリシャ哲学か——回顧と展望——

荻野 弘之

今回のシンポジウムは 2016 年 9 月 18 日（日）午後、国際基督教大学を会場として行なわれた。以下はその趣旨説明と簡単な報告である。

この催しは共同研究セミナーの第 20 回大会を記念する特別企画で、二年前の委員会で発案されて以来、委員の間で内容が検討されてきた。「回顧」という意味では、セミナーの発足以来、代表として学会運営を牽引してこられた田中享英氏に、また「展望」という意味では、幹事のうち最年少の荻原理氏に、さらに「第三の人間」としては（西洋古典の隣接分野〔史学・文学〕から招く案もあったが）、現代哲学専攻の森一郎氏に依頼することにした。森氏は過去にも登壇していただいたので知己も多く、ニーチェ、ハイデガー、アレントといった古典ギリシア哲学に縁の深いドイツの哲学者の研究を通じて現代文明への鋭い批判を展開しておられることから、本セミナーにとって「応援団」の役回りを期待した次第である。

ギリシャ哲学セミナーは 1997 年 9 月 27 日、東京大学（本郷）で第一回の大会を開催した。発足時の世話人は加藤信朗、岩田靖夫、田中享英、山本巍、今井知正、天野正幸、桑子敏雄、神崎繁、高橋久一郎、荻野弘之の十人で、代表は田中（北大）、事務局は天野（東大）が担当した。加藤の呼びかけに賛同した、主に東大・都立大の卒業生が糾合して大会を企画し、予想以上の参加者を集めて共感呼んだことから次年度以降も継続開催を確認した。広く日本全国の研究者に参加を呼びかけ、やがて委員の選挙（任期）制を導入し、2004 年以降は冊子体で大会の記録を残すことにして、現在に及んでいる（会員は 106 名）。

出発にあたり、日本哲学会、西洋古典学会など関連する全国学会との違いは以下の点にあった。（1）大学院生や若手研究者の発表が大半を占める多くの学会の現状に対して、中堅以上の研究者が自ら発表することで、レベルの高い共同研究の機会を設ける。発表者の選定は、会員の自発的な応募と推薦とを組み合わせる。（2）そのために、大会前にあらかじめ発表原稿を配布し、参加者が十分に「予習」や準備をしたうえで、報告を聞く（ただしこの制度は発表者にとっては負担が大きいし、準備が十分な参加者は残念ながら一部

にとどまっているようにも思われる)。また討議のための時間を十分にとって、議論を実質的に深化させることを目指す。(3) 大学院生などには「臨時会員」として、高額の年会費を負担することなしに実質的な学会参加の道を開く。その上で、質疑など発言を認める、というよりむしろ奨励する。(4) プラトン、アリストテレスなど研究が進んでいる古典期のみならず、ヘレニズムや新プラトン主義、あるいは科学史や後代への影響など隣接分野も視野に入れる。そのため、大会の全体テーマは三つの分野を毎年交替で取り上げるローテーション方式をとる。(5) 学会員以外からも随時ゲスト・スピーカーを招いて学問的交流を深める。(6) 特定の大学や地方を基盤にするのではなく、全国規模の参加を目指す。ただし大会の開催は、参集の便宜を考慮して首都圏での開催を主とする。(7) 3年ごとに開催される国際プラトン学会を誘致する際の受皿とする。ただしこの点は世話人(委員)の間でも意見の違いがあり、結局セミナーとして国際学会との提携関係は直接には持たないことになった。国際プラトン学会は2010年夏に(加藤信朗・納富信留共同会長のもと)慶応大学(三田)で開催されることになり、日本の研究の国際化推進に大きな足跡を残した。以上のように、セミナー発会当初の制度設計は、さほど形を変えることなく今日まで継承されている。発表と討議の水準、学会の規模、大会の参加者数、親睦会の雰囲気、会計の状況など、概ね良好に推移していると考えたい。

さて戦後70年の、あるいはセミナーの歩みと並行する直近の20年に限定するとしても、内外のギリシア哲学研究の進捗状況には著しいものがある。それは現在刊行中の『アリストテレス全集』(岩波書店)を、ほぼ半世紀前に刊行された「旧全集」と比較してみれば明らかであろう。もちろん著作ごとに事情は少しずつ違うにせよ、そこには世界的なレベルでの研究の進展と共に、わが国における研究水準の向上が刻印されていると思う。西洋古典叢書(京大学術出版会)をはじめ各種の文庫版などによる邦訳の普及も着実に進んでいる。また研究のグローバル化も著しい。大学院生が海外の大学に長期間留学して学位を取得し、国際学会で発表することも、この四半世紀間で決して珍しくなくなってきた。しかしこうしたミクロの視点では進歩と成長を続けるかに見える研究の状況が、哲学全体あるいは他の隣接分野への、さらに一般の読書人への訴求力やインパクトという点でも同様かといえば、皮肉にも事態はむしろ逆ではないかと思われる。他の分野を研究している同僚の研究者が何をやっているのか、知らないし、知りたくもないし、知らなければならぬとも思わない——こうした専門化・瑣末化(trivialization)への傾向は、知の全体性を標榜するはずの哲学の分野にも同様に浸透しつつある。だが「研究」が独り歩きして社会一般あるいは大学、読書界などと乖離し、研究の培養土そのものが痩せてくれば、やがては本体も枯れてしまうだろう。古典的な文献研究という、地味で歴史もあるけれど、実用性を問われもする研究を、今後どのように活かしていくことができるのか。慢性的な出版不況、大学における研究職の削減など、研究の進展、研究者の育成をめぐる状況は楽観を許さない深刻なものがある。今回のシンポジウムは、おおよそこうした時代認識や問題意

識を背景にしながら企画されたのである。

大会二日目午後のシンポジウムは、三人の提題各 30 分の後、休憩を挟んで 1 時間 45 分にわたって質疑応答と意見交換が展開され、発言者は計 14 人を数えた。そのいちいちが記録しないが、提題者による以下の掲載原稿のうちに、そのやりとりの成果が部分的に反映されている。学会のシンポジウムは何をやるにせよ、舵取りが難しい。今回の企画が成功であったか否かは、それぞれの参加者あるいは読者の評価に委ねられるほかはなからう。

なおシンポジウムの司会は職責上、神崎繁代表が勤める予定であったが、健康上の都合もあって最初の 10 分間、趣旨の説明だけにとどめ、後半の質疑応答の司会は荻野が引継いだ。最後に代表が閉会の挨拶をされたが、車椅子の上からニット帽を被った瘦躯の身で、切々にご自身の体験と感慨を語りかける様子は、残された時間の短さを自覚した、まことに胸に沁みる印象深い「告別の辞」であった。そしてこのシンポジウムが、私にとって（そして多くの参加者にとっても同様に）最後の学問的交流の機会となった。セミナーの 20 年の歩みを振り返るとき（また個人的には 38 年を超える）、様々な場面で神崎氏との交遊が思い出される。改めてご冥福をお祈りする次第である。